

4 実践プログラムの活用にあたって

1 実践にあたっての留意事項

実践プログラムの活用にあたっては、幼児又は小学校低学年児童を対象とした各プログラムを載せていますが、対象者の理解度や実態、対象人数、実践する場等に合わせて、弾力的に用いることが大切です。

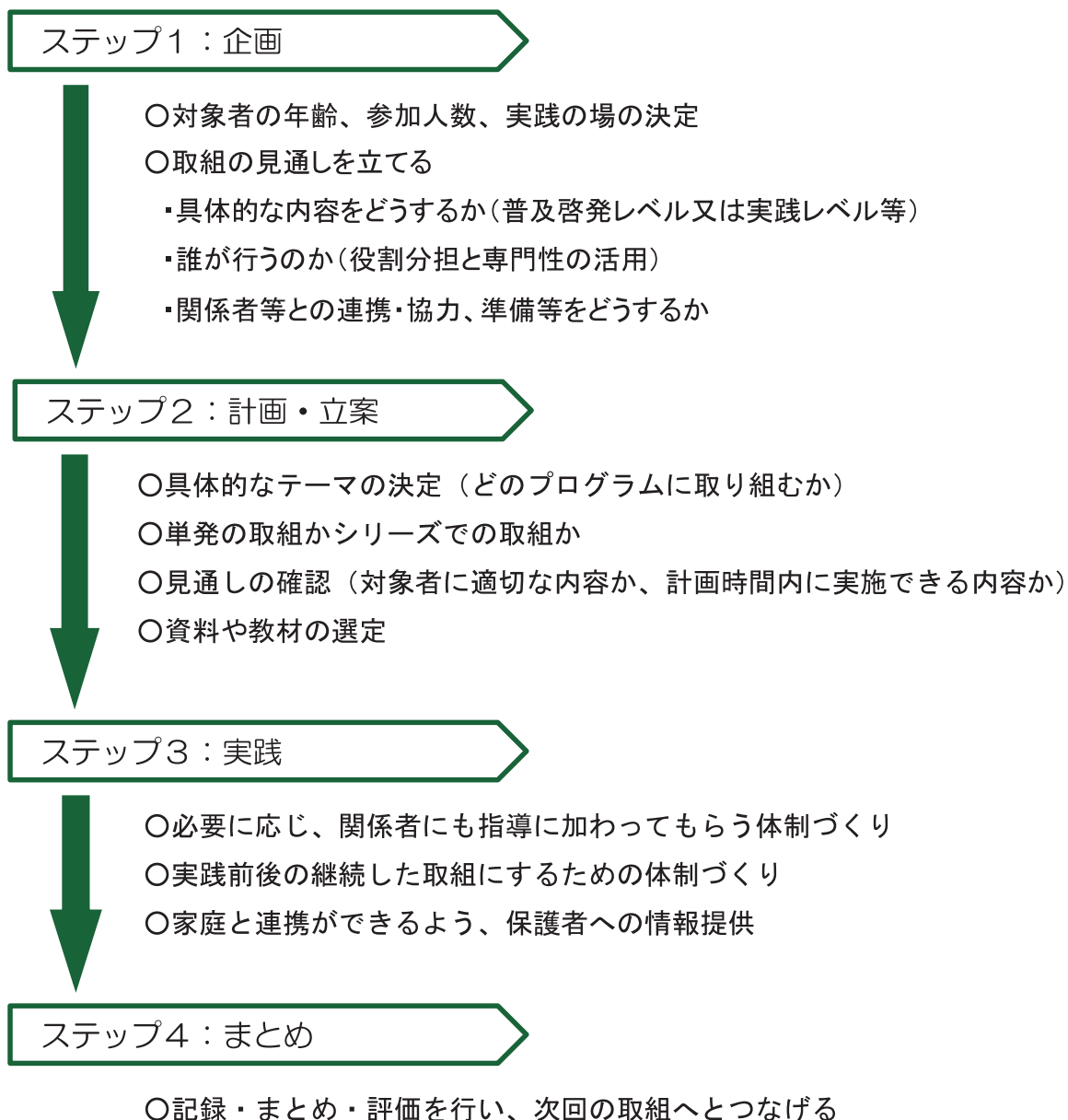
また、幼児や児童を対象とする食育指導や教室等においては、対象となる幼児や児童の理解度や実態把握が大切となるため、家庭や在籍する保育所、幼稚園、学校等との連携が必要です。

特に、実践する場が保育所や幼稚園、学校の場合は、各園や学校での日頃の指導や取組、食育指導計画と組み合わせることにより、より効果的な指導となります。

さらに、プログラムの実践がイベント的なもので終わってしまうのではなく、学んだことが継続して行われ、幼児や児童の実践力として身に付くためには、プログラム実践前後の働きかけが大切となります。

プログラムを用いた指導や教室は、対象となる幼児や児童に関わる園や学校の職員等の関係者、そして家庭での実践につなげるために保護者と連携して実施する必要があります。

2 実践プロセス



3 実践プロセスにおける留意点

①企画

対象者、参加者の人数、実践の場を決めたら、どのような食育活動とするのか、誰が何を行うのか、関係者等との連携や協力について取組の見通しを立てます。

特に、保育所や幼稚園、学校で実践する場合は、園や学校の職員と子どもたちの課題を共有し、一緒に食育教室を行う体制づくりが欠かせません。

内容や状況により、どのように実践することができれば効果的な食育活動となるのかを考えます。

②計画・立案

プログラムを用いた指導や教室等の開催にあたり、効果的な食育活動となるためには、対象者の実態を把握する必要があります。実態把握にあたっては、対象者の食生活、食に関する知識や技能、理解度のほか、園や学校、家庭での日頃の取組についても把握することが大切です。

実態把握から、どのプログラムに取り組むか、指導や教室の実施回数をどうするか決め、実施内容が対象者に適切であるか、計画時間内に実施可能かどうか等の見通しを確認します。

また、資料や教材については、日頃から園や学校等で使っている物や家庭生活上で目にするもののある物等、対象者にとって身近な物を活用することで、より効果的な働きかけとなります。

③実践

実践時には、対象者の反応を大切にし、場合によっては日頃対象者に接することの多い園や学校の職員に加わってもらうことも必要です。

また、継続的な取組とするためには、園や学校等で実践する場合は、プログラム実践当日のみならず、実践前及び実践後の働きかけも大切となります。園や学校の職員と一緒にプログラムを活用を進めることで、子どもたちがプログラムで習得した知識を意識し、実践活動につなげやすくなります。

さらに、対象者が学んだことを家庭に情報提供し、家庭生活でも取組ができるように、保護者と連携する工夫が必要です。

④まとめ

実践後には、次回取組へとつなげるために、記録・まとめ・評価を行うことが大切です。

評価の視点としては、「学習の評価」「食生活・行動変容の評価」「指導内容・方法や指導体制の評価」があります。

ア．学習の評価

実践プログラム例の到達目標の達成度やまとめにおける感想等により行います。

イ．食生活・行動変容の評価

一度の取組で評価することは難しい場合が多いですが、実践前後の実態把握により行います。

ウ．指導内容・方法や指導体制の評価

対象者に合った指導内容・方法、指導体制であったかを関係者での検討により行います。